

一般財団法人 沖縄美ら島財団

ふえぬかじ

南ぬ風

広報誌

2016.4~6

Vol. 39

春号

公園管理のさらなる技術向上を。



ちゅらら

「40年をふり返って、率直なご感想はいかがですか？」
海洋博公園を管理してこの40年、いかにお客様に喜んでもらえるか、効率的に維持管理するか、そのためには沖縄の自然・歴史・文化の調査研究が大事であり、総合的に取り組んできました。一口に公園管理と言っても幅は広く、海洋博公園の植物の維持管理と展示、動物の飼育、1975年の沖縄国際海洋博覧会政府出展の海洋文化館、おきなわ郷土村。そして国が建物等を復元した首里城では、展示物を復元させる運営管理、さらにお客様の満足度を高めるイベントの企画など、公園管理の技術向上が常に求められているわけです。

40年の間には、さまざまなことがありました。平成24年度からは、質・価格の両面で総合的に最も優れた者が管理運営者となる民間競争入札制度が導入されました。これまで培ってきた技術やノウハウが評価され、国営公園の管理を受託しています。

ウハウが集積されている。沖縄国際海洋博覧会当時にできた国営沖縄記念公園水族館をずっと管理して、飼育技術をつないできた。おかげで、今の沖縄美ら海水族館があるわけです。

植物の調査研究・農業振興の分野では、バイオ技術の活用も有望です。従来は一つの優良なバイナッブルを増やしていくにも時間がかかりましたが、クローン技術で農家の皆さんの手に早く届くような形にすることも可能です。今後はこうした生産活動を積極的に進めて、農業振興にも貢献したいと考えています。

また、沖縄美ら海水族館と首里城公園は、沖縄観光の目玉です。施設も素晴らしいですが、加えてそれぞれにノ



一般財団法人 沖縄美ら島財団 理事長 花城良廣

HANASHIRO YOSHIHIRO

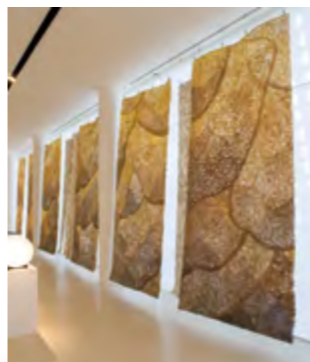
文＝いのうえちず

八重山農林高校・千葉大学園芸学部卒業。旧海洋博覧会記念公園管理財団の熱帯・亜熱帯都市緑化植物園長や本部長などを歴任し、2014年に沖縄美ら島財団の理事長に就任。1950年、鳩間島生まれ。

これからも、美らなる島の輝きを御万人へ
1976(昭和51)年、海洋博覧会記念公園を管理する組織としてスタートした当財団。2012(平成24)年に財団法人から一般財団法人に移行し、名称を「沖縄美ら島財団」に改称した。今号の「南ぬ風」では、設立40周年記念の特別企画として、花城良廣理事長にインタビューを実施。設立からの40年をふり返り、財団のこれからについて話を聞いた。

contents

40周年記念特別インタビュー…02
調査研究…06
普及啓発…08
御城物語…09
沖縄の大木…09
運営管理…10
スポットライトの向こう側…12
財団いんふお…14
編集後記…15
おもろさうしの植物…裏表紙



作品タイトル「風がとふる」 沖縄美ら島財団理事長賞
広い窓で光に透かして見ることを意識し、海の中の花畑のようなサンゴ礁をイメージした大型作品。オクラとハイビスカスの繊維から溜漉きの技法で紙を作り、版画の一種であるシルクスクリーンとレーザーカットによって加工し、文様をつけていった。
沖縄県立芸術大学 美術工芸学部 デザイン工芸学科 デザイン専攻 野田 菜摘さん(大阪府出身)
今号から、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第27回卒業・修了作品展」にて受賞した4作品が表紙を飾ります。1年間、学生たちの瑞々しい感性による作品をお楽しみください。
誌名「南ぬ風(ふえーぬかじ)」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育てられてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。

沖縄のために、やるべきことをやる。

た美ら島自然学校でもさまざまなプログラムを実施しています。特に嘉陽小学校は元々、財団の職員が出向き、子どもたちにウミガメの学習会を行っていた経緯から、ウミガメの観察ができるような水槽を設置し、引き続き地域の子どもたちとウミガメの観察会などを行っていきたくと考えています。

—大学とも連携していますね。
これまでに、OIST（沖縄科学技術大学院大学）や琉球大学、沖縄県立芸術大学と包括連携協定を結んできました。2月には、名城大学とも協定を締結しました。この協定によって例えば観光学を学ぶ学生が観光施設でインターンシップを行うなど、研究だけでなく人材育成の面でも貢献できるのではないかと考えています。さらに、総合研究センターでは、毎年、当財団の目的に合った調査研究や技術開発に助成をしようと、研究者たちの意欲的な研究を募集しているんですよ。

—40年の歴史の中で培ってきたものが、ここ最近では次々と花開いているような印象を受けますね。今後に向けて課題は何ですか？
首里城公園のリピーターを増やすこと、それと地元の方にさらに首里城公園へ足を運んでいただくことでしょうか。首里城公園では、県立芸術大学と連携しコンサート等の企画を実施し、卒業制作を公園の魅力となるよう検討しています。1000点近い美術工芸品がありますから、企画展示で手法を変えて魅せていきたい。今年から試験的に、国王と王妃が衣装を着て正

殿前の御庭に登場するというプログラムを実施します。

—そういった動きがあると、今後の利用者増につながると思っています。
水族館はいつ見てもお客さんがいっぱいですが…。
沖縄美ら海水族館は、沖縄観光を支える重要な施設ですので多くのお客様にご利用いただけるよう、沖縄観光コンベンションビューローなど観光関係の方々とも連携して積極的な広報を実施しています。努力の結果、年間約330万人が来館されました。快適にご利用いただくため空調管理を向上させ、入場改札も効率的な機械を導入しました。混雑緩和のため来館者数ピークの時間帯をシフトするよう、利用情報をホームページに表示すると共に、夜間開園し、夕方4時から割引チケットを導入しました。本部町など北部地域の宿泊増や地域の観光振興になればと考えています。

—水族館の役割の一つは、繁殖と種の保存です。それはいかがですか？
今後はジンベエザメの繁殖も計画しています。ジンベエザメは一度に約300匹の仔ザメを出産する、という記録もあり、成功したら大変なことになるんですよ（笑）。イルカは沖縄近海種も含め6種類を飼育していますが、野生からの導入が難しくなりましたので、人気プログラムの持続や種の保存のため、イルカの繁殖技術の確立が我々のこれからの課題です。

—今後の展望をお聞かせください。
これまで40年間の一歩一歩を、新し

を、御万人つまり世界へ伝えていこうということ。それは沖縄のためにやるべきことはやる、ということになるんですね。

—財団は人材育成という面でも、沖縄県全体に貢献していますよね。
調査研究の成果を、地域社会の皆さんに普及啓発していくという考え方で、いろんな教室を展開しています。小中高生に科学や環境問題への関心を持つてもらおうと、新聞社の沖縄子ども環境調査隊（沖縄タイムス社）や新報サイエンスクラブ（琉球新報社）に共催しています。つい先日は、新報サイエンスクラブが文部科学省の審査委員会特別賞を受賞したといううれしいニュースがありました。

—他にはどのような子ども向けプログラムがありますか？
沖縄美ら海水族館や首里城公園でも子ども向け体験プログラムを行っています。指定管理を受けている名護青少年の家や、嘉陽小学校跡地を利用し



2016年4月より財団が施設管理や一部展示会の企画等を行う「沖縄県立博物館・美術館」

技術・知見・ノウハウで産業振興に寄与。

—この40年、植物、動物、そして美術工芸品や歴史・伝統文化の分野でも、財団ではさまざまな調査研究活動が行われてきました。各分野で意識していることは？
基礎研究はもちろん大切ですが、財団の特色としては、できるだけ社会に密着した研究であること、つまり地域社会への貢献と、産業振興への寄与だと考えています。最近では、本部町の特産であるカツオ漁を振興・普及するため、町と漁協と財団の三者が協力して、カツオ漁のエサになる小魚の生態を利用した捕獲技術を開発しました。また、国頭漁協との共同出資でOS C（Okinawa Sakana Company）株式会社を立ち上げ、国頭村の定置網にかかった魚を国内外の水産館に供給するという事業も始めています。指定管理を受けている名護市の農業六次産業化支援施設（なごアグリパーク）でも、地元の人たちと一緒に運営法人を作ったという動きがあります。

—首里城のほうはいかがですか？
首里城公園での調査研究も様々な取り組みをしています。まずハード面では、首里城そのものに漆が塗られていますね。首里城は巨大な漆器だったとも言われています。しかし、戦争で焼失したため文献が少ない中、わかる範囲で検討を重ねペストを尽くして復元されました。

—後に様々な資料が発見され、かつての技法も判明してきました。首里城の塗り替えを国等から受託した際には、塗装工程や古文書にあった材料に至る

まで専門家の方々に議論をしていたら、漆職人の方にも加わってもらい、順次塗り替えていきました。先人の技術の再現と沖縄の漆芸復興に寄与できそうです。

—財団は美術工芸品も収集・研究していますね。
琉球王国時代の美術工芸品を収集して、内部構造をX線透過像で見ることが往時の制作技術がわかってきています。今後は、御冠船踊りや御座楽などの無形文化も研究を進めたいと考えています。和食はユネスコ無形文化遺産に登録されましたが、琉球料理も研究が進めば、無形の文化として今より認知されます。

—琉球王国時代の宮廷料理の復元ができれば、観光資源になりますね。
もちろんです。沖縄県の観光ロードマップの中にも「食」という言葉が出てきます。県の施策を推進することも財団の役割の一つです。私どもの理念「美らなる島の輝きを御万人へ」というのは、沖縄の美しい自然や歴史・文化



琉球王国時代の美術工芸品「漆絵御供飯」

を、御万人つまり世界へ伝えていこうということ。それは沖縄のためにやるべきことはやる、ということになるんですね。

—財団は人材育成という面でも、沖縄県全体に貢献していますよね。
調査研究の成果を、地域社会の皆さんに普及啓発していくという考え方で、いろんな教室を展開しています。小中高生に科学や環境問題への関心を持つてもらおうと、新聞社の沖縄子ども環境調査隊（沖縄タイムス社）や新報サイエンスクラブ（琉球新報社）に共催しています。つい先日は、新報サイエンスクラブが文部科学省の審査委員会特別賞を受賞したといううれしいニュースがありました。

—他にはどのような子ども向けプログラムがありますか？
沖縄美ら海水族館や首里城公園でも子ども向け体験プログラムを行っています。指定管理を受けている名護青少年の家や、嘉陽小学校跡地を利用し



研究した児童らが成果を報告する新報サイエンスクラブの研究発表会

*1【御冠船踊り】
冊封使歓迎のために披露された宮廷芸能の舞踊。
*2【御座楽】
琉球国の室内楽。冊封使歓迎を目的として発展した宮廷音楽。

『爬龍船競漕及び帰唐船の図』について～西洋の青との出会い～

沖縄美ら島財団の所蔵資料で、「爬龍船競漕及び帰唐船の図」という作品があります。この絵図の右上には進貢船が大砲を撃っている描写があります。進貢船は、那覇港に帰ってきた時に港に入る合図を兼ねて祝砲を撃っていたことが分かっているのです。その情景を描いたものと思われまます。

本作品は、調査を進めると滋賀大学所蔵の琉球貿易図屏風と類似した描写が幾つか見られることが分かりました。琉球貿易図屏風は、2001年に保存修復作業を行った時に絵図の裏にあった下貼文書の記述から、薩摩藩が製作に関与していた可能性が指摘されています。

また、本作品の保存修復作業の際に、大変興味深いことも判明しました。修復を行いながら、絵図に使用されている色材の化学調査を行ったところ、海を描いた青色の部分から、鉄の反応が出ました。通常、「青」に使われる色材には、植物染料の藍や、鉱物顔料の群青などがあります。群青は、藍銅鉱（アズライト）という銅を含んだ鉱物で、青色部分に銅を示す結果が出ることが多いのですが、本作品で

は青色の部分から鉄が検出されるのです。鉄が検出される鉱物顔料というと、首里城正殿の壁に塗られている弁柄という赤い顔料があります。これは酸化第二鉄が主成分なので、鉄が検出されることがよく知られています。この弁柄をはじめ、鉄分を含む顔料は、一般的に赤色となるものが多いのです。それでは、青く描かれた部分から鉄が検出されるのはどういうことかと調査を進めると、なんと「プ

ルシアンブルー」と呼ばれる遙かヨーロッパのドイツで発明された人造顔料が使用されていることが判明しました。プルシアンブルーは、1704年頃、ドイツの都市ベルリンで偶然、製法が発見された顔料です。これは中央アジアのアフガニスタン辺りから輸入されていた大変高価なウルトラマリンと言われる天然の青色の鉱物顔料よりも安価に調達できたので、その製法が各地へ伝播



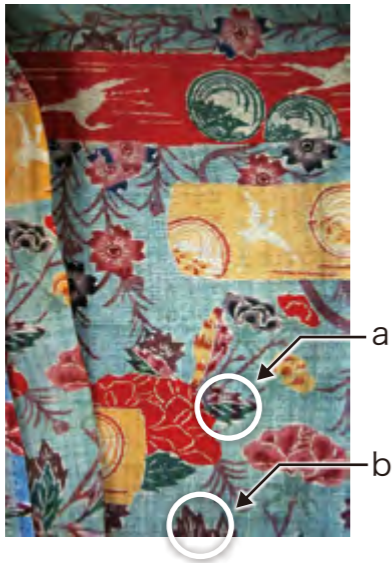
爬龍船競漕及び帰唐船の図(19世紀前半)
海面部分の青色にプルシアンブルーが使用されている。



(図の右上部分)
進貢船は、大砲を撃った砲煙がのぼっている様子が描写されている。



芋麻浅地菱つなぎ両面紅型単衣裳(19世紀前半)
(ちよま あさじ ひし つなぎ りよめん びんがた ひとえ いししょう)



aとbの葉の緑色部分から、プルシアンブルーを示す特性と砒素が検出された。プルシアンブルーと砒素を用いた石黄という顔料の混色で緑色を表現したものである。

しました。日本国内での初見は、1763(宝暦13)年の平賀源内が著した『物類品鑑』に「ペイレンプラーウ」として紹介されています。「ペイレンプラーウ」とは、ベルリンのブルーという意味なのでしょう。顔料として国内で普及したのは19世紀を過ぎてからで、葛飾北斎が1831(天保2)年に刊行した富嶽三十六景の青色の描写に、プルシアンブルー(ベルリン藍、ペロ藍とも呼ばれました)が使われていたことが分かっています。

琉球では、1777(乾隆42)年に150斤(89・523kg)相当が中国より輸入されていることを、清朝政府が発給した琉球関係の档案(公文書)の記録にあることが当財団の研究で発見しました。その後、1803(嘉慶8)年に2000斤(119・364kg)、1830(道光10)年は1000斤(596・82kg)が輸入されたことが分かっています。日本国内で普及しはじめた1830年代よりも約50年早い1777年に大量のプルシアンブルーが琉球に輸入されていたのです。おそらく琉球だけでは消費できない量なので、顔料として日本市場にも琉球を経由

してプルシアンブルーが流通したものと推測されています。

琉球内では、先述の「爬龍船競漕及び帰唐船の図」の色材に使用されたり、当財団が所蔵する多数の紅型衣裳等の資料にも使われていたことが、当財団と吉備国際大学の下山進教授の研究グループとの共同研究で明らかになっています。文献史料に記録されていた史実が、美術工芸作品の化学調査によって証明されたのです。琉球を成り立たせていた貿易活動の結果、海を渡ってきた青い絵の具(顔料)が、この進貢船の絵図に描かれていたのです。このプルシアンブルーが使われた「爬龍船競漕及び帰唐船の図」や紅型衣裳は、首里城公園の南殿二階特別展示室や、黄金御殿特別展示室で都度、展示公開を行っています。琉球と西洋の青との出会いに、不思議な組み合わせを感じるかもしれませんが、訪れた際にぜひ鑑賞ください。

(上江洲 安亨)



芋麻浅地牡丹枝垂桜両面紅型単衣裳(19世紀前半)
(ちよま あさじ ぼたん しだれざくら りよめん びんがた ひとえ いししょう)



地色の青はプルシアンブルーで染められている。

見ただけでは分からない植物の面白さを伝える



フラワーガイドツアー



熱帯植物学習・観察ツアー

熱帯ドリームセンターでは、開館以来約30年間にわたって培われた豊富な知見を活かし、ご来館のお客様に植物への関心と理解を深めてもらえるよう、専門の職員による植物ガイドを開催しています。「フラワーガイドツアー」は、見ごろの花や果実等について、分かりやすく解説しながら、ラン温室と果樹温室をご案内しています。複数回来館された事のあるお客様からも「自分達だけで回るよりも、案内してもらった方が植物について理解が深まる」と好評をいただいています。

また、「熱帯植物学習・観察ツアー」では、当財団が制作した小冊子「熱帯植物の不思議」を活用し、より「学び」の要素を深めたプログラムとなっております。「どんな特徴を持っている植物をランと呼ぶの?」「世界で一番大きな果物の重量は?」等、クイズ形式で学べますので、大人だけでなくお子様も楽しく学ぶことができます。この学習・観察ツアーは、団体での受け入れも進めており、自治会等の

研修旅行や、小中学校・高校の修学旅行の学習の場としても、ご利用いただけます。

これらの植物ガイドに加えて、熱帯ドリームセンターで植栽されている植物に親しんでいただける「熱帯の植物体験イベント」と題したクラフト体験も実施しています。アイスクリームでも有名なバナナの実の好物を使ったサシェ(香袋)を作ったり、美しいランの生花を使ってコサージュを作ったり、親子にも楽しめるプログラムを月毎にテーマを変えて開催しています。

見ただけでは分からない植物の面白さを伝えられるよう、お客様のご要望に応じて定時の開催時間外でも随時受付のご相談を承っています。

植物を見る・学ぶ・触れる。熱帯ドリームセンターの植物ガイドと体験イベントにぜひご参加ください。

(瀬底奈々恵)

フラワーガイドツアー

毎日 11:00、14:00 開催

熱帯植物学習・観察ツアー

毎週土曜日 15:00 開催

※ご要望に応じて対応いたします。

熱帯の植物体験イベント

毎週土・日曜日 13:30~16:00 開催

※随時受付をしています。



熱帯の植物体験イベント

うぐしくものがたり Vol.11 御城物語

かつて、首里の人々が「御城(うぐしく)」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関係するトリアを語る歴史エッセイ。

百人御物参

「百人」とは、「たくさんの人」を表す言葉で、16、17世紀に成立した『おもろさうし』や古謡、琉歌、17世紀に編纂された辞典『混効験集』にも見ることができ、「御物参」は、聞得大君御殿や首里殿内等へ神女や役人達がお参りをする儀礼のことです。

この行事は、首里城においては正月と四月に行われていました。1713年に首里王府によって編纂された『琉球国由来記』に、祈願の内容や拝む場所について記録されています。

(久場まゆみ)



上:京の内巡拝 下:首里森御嶽拝礼(平成26年度実施の様子)

沖繩の大木



ハマシタンはミソハギ科ミズガンピ属の常緑低木で、沖縄各島、太平洋諸島に分布します。極めて耐湿性が強く熱帯地方においては、満潮時に海水に浸るようなリーフ上にも生育するほどで、沖縄では海岸沿いの隆起サンゴ礁石灰岩上に群生する姿を目にします。枝は岩場に這い、葉は肉厚で細かく岩を覆うようになっています。花は直径が1 cm程度の小さく白い可憐な花を咲かせ、樹姿が美しいことから盆栽に使われます。また、潮風に非常に強いことから沖縄の海岸沿いの緑化材料にも有用な植物です。

波照間島の西海岸にはハマシタン群落があり、波打ち際のサンゴ礁石灰岩上に20本前後が生育しています。樹齢は300年以上とも言われており竹富町の天然記念物に指定されています。通常本種は岩を這うような姿をしていますが、この群落のハマシタンは、太い幹がくねくねと絡みあいながら起き上がるように立っており、力強い姿をしています。高さは3.5 m程、幹周りは2 mに及ぶものもあり、これほどの大木は現在ではとても珍しいものです。この群落がある毛崎海岸は青い海の広がる静かな海岸ですが、夏には台風が襲い、冬は強い北風に吹かれる厳しい環境です。

長い時間ハマシタンは穏やかな海を眺め、時には嵐にもまれながら生きてきました。これからも波照間の海を見つめながら時を重ねていくことでしょう。

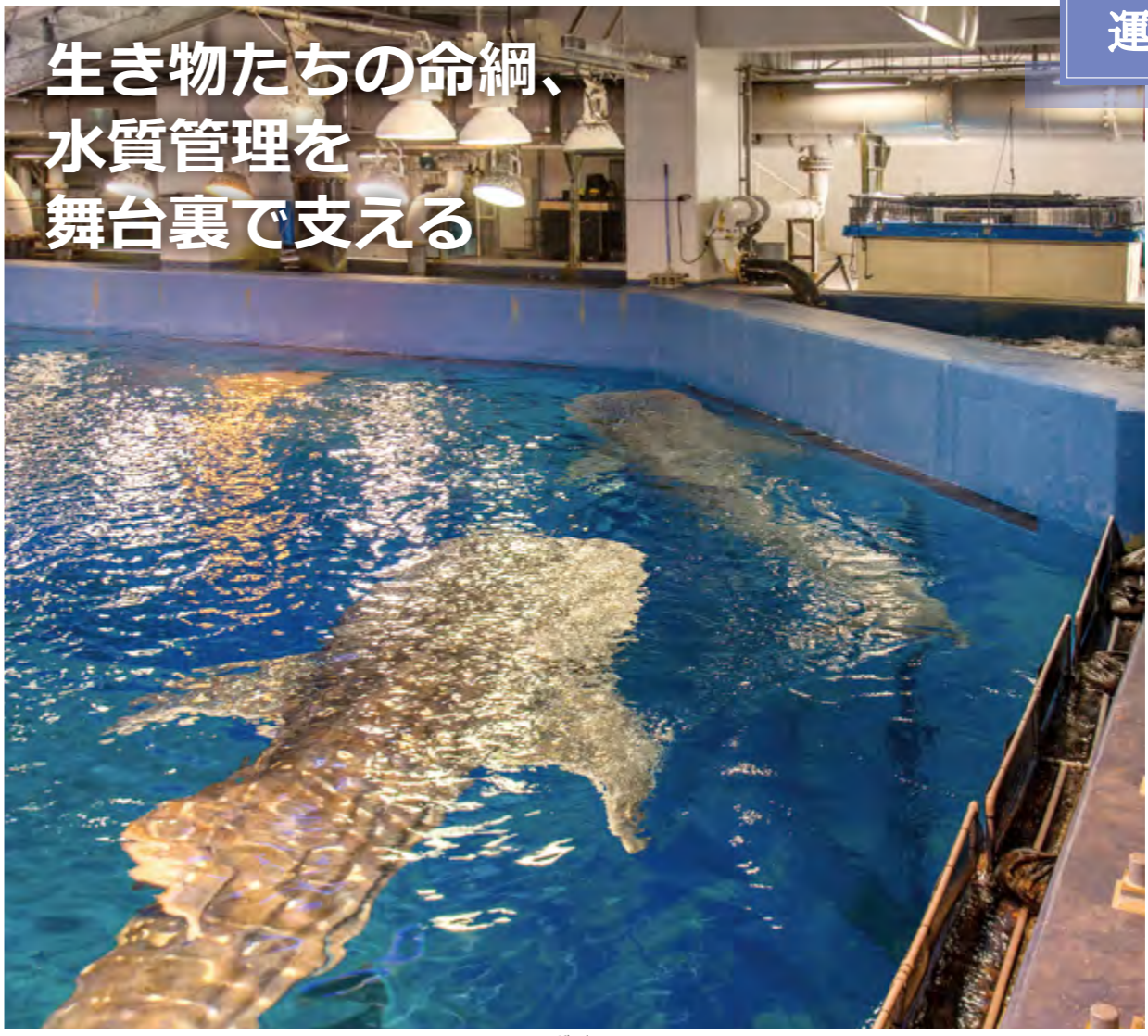
(篠原 礼乃)

レッドデータカテゴリ：準絶滅危惧(沖縄県)

<和名>ハマシタン (別名:ミズガンピ)

Vol.31

<科名>ミソハギ科 (学名: Pemphis acidula G.Forst.)



生き物たちの命綱、
水質管理を
舞台裏で支える

上から見た「黒潮の海」水槽。写真右上の巨大なパイプからろ過後に曝気水槽でエアレーションされた海水が送られてきて、そのまま「黒潮の海」水槽へと供給される。

巨大なるろ過器やポンプは
まさに水族館の心臓部

沖縄の海をそのまま展示するというコンセプトの沖縄美ら海水族館。自然界で暮らす生き物は自分に合った環境で生活したり、移動したりできるが、水族館では自ら生息環境を選ぶことはできない。水質管理をしっかりと行い、環境を整えることは、その生物の長期飼育や繁殖には欠かせない基本条件。ろ過器やポンプなどの設備がある機械室は、水族館の心臓部だ。それを管理するのが、水族館事業チーム。

「水族館事業チームは幅広い業務を担っていますが、中でも水質管理は生き物のいのちを守る、重要な業務です」と語るのは、水族館事業チームの金城宙志技師。

「海洋公園のエメラルドビーチは、沖縄県内でもトップクラスの水質を誇ります。水族館の海水は、そのエメラルドビーチに隣接する場所から、1時間に3000トンを取水しているんですよ」

引き込んだ海水はポンプでろ過するろ過器へと送られる。ここで活躍するのが、不純物を吸着するポリエステル繊維で作られた綿毛のようなボール（11頁②b）この綿毛の

ようなボールがフィルターの役割をして、海水の不純物を取り除く。取水ろ過器から受水槽に溜められた水は、曝気水槽へ。ここで空気にさらすエアレーションを行うことで水中に酸素を取り込み、各水槽へ送られる。

「新しい海水をかけ流しにしているのは、「サンゴの海」水槽。限りなく自然に近い状態で、サンゴや熱帯魚が飼育されています。水族館で最大の「黒潮の海」水槽には約7500トンの水が入りますが、毎日補給される新しい水の量は水槽4杯分。循環する水は水槽12杯分、これだけを見ても、大量の循環水の管理が重要だとお分かりいただけると思います」

循環水は、砂が入ったろ過器を通り、ポンプで曝気水槽に送られて各水槽へと戻っていく。

いずれの水槽でも常に監視されているのは水温。その生き物の生息水深によって適正水温は異なる。なお、深層の海水槽はクーラーを使って水温設定をしており適正温度は14度だ。

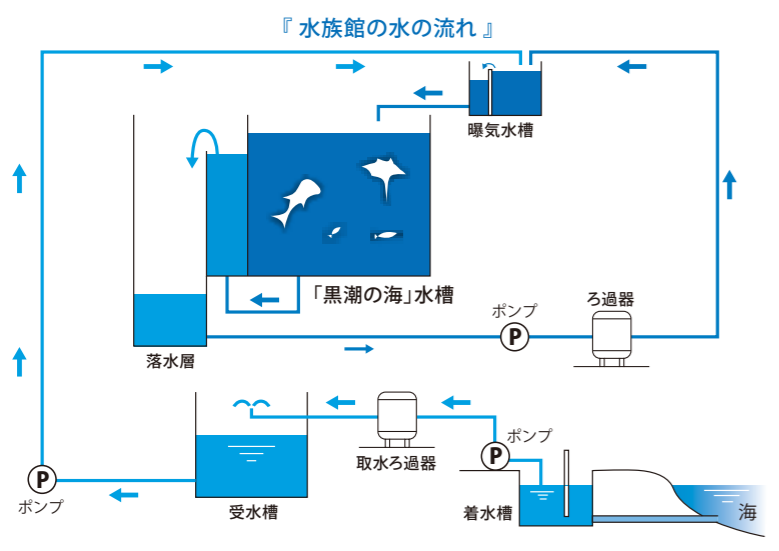
着水槽への海水の引き込みは、沖合300m、水深20mより直径1.8mの取水導水管方式を取り入れてい

る。取水された海水は、最新の機器で処理され、水槽を満たす飼育水となる。飼育水は、魚たちにとっては住環境の一部。魚の健康管理には水質の管理が欠かせないため、魚類チームが定期的に検査を行っている。

毎日測る海水温は、その日に与えるエサの量を決める要素の一つだ。また、大雨が取水海水に流入すると、塩分などの濃度に影響を及ぼすため、状況に合わせて比重測定を行う。飼育魚の糞尿などの排泄物や、飼育生物の死骸、食べ残したエサなどは、微生物によって有毒なアンモニアに分解される。これが蓄積すると大変危険なため、溶存酸素量(DO)、pH、アンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素は定期的検査。アンモニアと亜硝酸の値を見れば、循環水のろ過が正常に行われているかがわかるという。中でもpHは「水の汚れ具合」をチェックする指標で、通常は8.2〜8.3だ。

「水族館の教育普及プログラムでは、バックヤード見学があります。普段は滅多に見られない水族館の舞台裏ですので、機会があればぜひご参加いただきたいですね。詳しくは、水族館ホームページをご覧ください。」

文＝いのうえちず



- ①海水取水は、沖合 300m、水深 20m、直径 1.8m の導水管取水方式を取り入れている。
- ②-a ズラリと並ぶ取水ろ過器。装置全体の高さは約4メートル。
- ②-b ポリエステル繊維で作られた綿毛状のボールは「ケマリ」。劣化すると取り替えられる。
- ③ろ過海水補給ポンプ。天井を走るのは各水槽へのパイプで、水族館の大動脈のような存在。
- ④-a 循環ろ過器。
- ④-b 循環水は砂でろ過される。
- ⑤水族館事業チームの金城宙志技師
- ⑥「危険ザメの海」水槽へと送る水の量を管理するメーター
- ⑦海水をかけ流しにしている「サンゴの海」水槽。



装道礼法きもの学院
『分院』照屋幸子きもの学院

照屋 幸子 てるや さちこ



メイドですが、とにかく重くて…5キロはあったんじゃないかしら」
— 玉冠（國王の冠）まで入れると着るだけでも大変そうですね。

照屋「国王役を務める方は皆さん『衣装が重い！』と驚いていますよ。9月の中秋の宴で選出されて1年、衣装や所作に慣れてきた頃に『退位』となりますから、『もうちょっとやりたい』という方も多い（笑）」

— 国王・王妃役の公募が始まったのが1996年ですね。
照屋「それ以前は、関係機関の役職のある方が国王役でした。『自分だというのがわからないように、琉球舞踊のメイクなみに白塗りしてほしい』という方もいらっしゃいましたよ」

— 毎年9月に首里城公園で開催される中秋の宴では、国王・王妃選出大会が好評ですね。先生は審査員のお一人ですが、選定基準は何ですか？
照屋「着付けの立場から言うと、衣装のサイズが決まっているものから、国王役の身長は170センチ以上欲しい。王妃役は160センチ以上がいいですね。私たちは国王・王妃の衣装をセッ

トにして取り扱います。国王は皮弁服と玉冠で王妃は緞子の打掛という組み合わせを『唐衣装』、国王はハチマチと大帯で王妃は首里織の打掛という組み合わせを『琉装』と呼び分けています。唐衣装で国王が着る皮弁服のポインツは後ろ姿なので、猫背の方は困りますね。また、1キロある玉冠をかぶるので、頭が大きすぎても小さすぎても合わないんですね。それから、国王も王妃も、品格が滲み出ているような顔立ち、出立ちの方がいいですね」
— 唐衣装と琉装の使い分けは史実をベースに、冊封儀式や新春の宴などの公式行事の席では唐衣装、私的な行事である国王御三ヶ寺参詣行列を再現した琉球王朝祭り首里・古式行列では琉装ですね。
照屋「実は国王の唐衣装は現存する実物を元に復元されました。王妃のほうの唐衣装は、実物がないので完全復元ができず、尚円王の出身地で首里王府とゆかりの深い伊是名島の最上級神女の衣装を元に復元したものです。史実では儀式など表の世界に王妃が出ることはありませんでした。現在、行事に王妃が同席されるのは、イベントの演出として行われていることなん

元を担当されたルバース宮平吟子先生（首里織／沖縄県立芸術大学名誉教授）の推薦で、着付けを担当することになりました」

— 国王の皮弁服姿は威厳がありますし、王妃は華やか。でも実際に着るには重そうに見えますね。
照屋「実は今の衣装は二代目で、初代のものより軽いですよ。初代の唐衣装は中国で発注したオーダー

— 国王の皮弁服は、日本の皇室に例えたら衣冠束帯のようにフオーマルで特殊なもの。独特の知識と技術が必要ですよ。照屋先生が首里城公園で着付けのお仕事を始められたきっかけは何ですか？
照屋「私は、琉球舞踊をしていた関係から、からじ結い（琉球の結髪）や着付けも勉強していたんですよ。1992年に首里城が復元され、首里城公園として一部開園した時の王朝絵巻行列で、衣装の復

— 頼もしいお言葉ですね。

照屋「いえいえ（笑）、実際、イベントは手探りでやってきた部分もあるんですよ。国王や諸官の所作について文献があるわけではないので、礼法も勉強して所作の指導をします。例えば臣下はやたらと国王の顔を見ないとか、正中（真ん中）は神様や国王の通り道だから臣下はお尻を向けないとか…首里城公園のイベントは大勢のお客さまが、そういう動きもご覧になるので気を抜けません。特に写真は、どの部分から撮られてもいいように、所作と所作の流れにも気を配ります」



国際通りで行われる琉球王朝絵巻行列

— 現代人の生活様式の中では、なかなかない所作が多そうですね。

照屋「はい。例えば、お付きの若衆や諸官には、跪坐（正座のようにひざまづいて座り、かかとを浮かせてすぐに動けるような状態にする姿勢）や屈体・膝進・膝退（ひざまづいたまま進む・退く）という動きが求められますから、やはり練習は必要。国王も所作を特訓しますよ。冊封儀式ひとつとっても、リハーサルを6回行って全員に所作を覚えていただきます」

— それはハードですね。照屋さんが国王役の方に求めることは？

照屋「着付けという私の立場からは、やはり衣装を見せたいという気持ちがあります。そのために動作も、男らしく、かつ優雅に。国王役には体格、体力、品格が大切だと思えますよ。その上で、国王は琉球を代表する存在だという自覚を持っていただきたい。首里城のこと、琉球の伝統文化のことを勉強して、発信できる方であってほしいと思います。ちなみに、今の国王役・王妃役もとっても素直で、自分から勉強しようという姿勢で何でも質問されて、内面もステキですよ」



正月儀式「朝拝御規式（ちょうはいおきしき）」のようす

— これからの首里城について、何か期待されることはありますか？
照屋「実は国王を見たことがないという沖縄の方が多いんですよ。もっと、沖縄の方にこそ、首里城のことを知っていただきたいと願っています」

文||いのうえちず

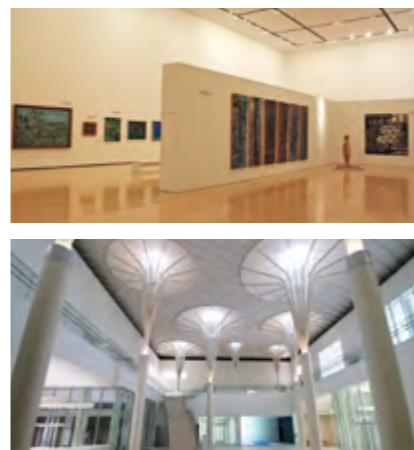
— 最初の絵巻行列では国王は琉装姿だったそうですね。
照屋「はい。最初に唐衣装が作られたのは1998年で、今使っている二代目の衣装は2007年に作られたものです。約10年の間、手直ししながら使っています」
— あれだけの刺繍がなされた特注品です。取扱注意ですよ。
照屋「一番気になるのは、雨です。着付け担当としては『人間は濡れても、衣装は濡らすな！』という姿勢です。本来なら手袋をつけて着付けをしたところですが、それでは微調整ができないので、手は清潔にして、なるべく汚さないように気をつけています。それから、座る時も絶対に一人では座らせない！介助がなくては、飾りひもをひきずったり、衣装を傷める可能性がありますから。自動車や御輦（国王の乗る輿）に乗り降りする時が一番気を使います。衣装は布より縫い糸が先に劣化しますから、上手に動かないと糸が切れてしまうこともあるんですよ。でも20年間の経験の蓄積がありますから、仮に衣装が破れたとしても、何とかしますけれど」

沖縄県立博物館・美術館の指定管理者になりました

沖縄美ら島財団は、2015年12月に「沖縄県立博物館・美術館」の指定管理者に指定されました。2016年4月から2020年3月までの5ヶ年間、沖縄県の歴史、芸術、民族、自然科学を総合的に展示する「沖縄県立博物館・美術館」の指定管理者として同館の施設管理や一部展示会の企画、教育普及活動の運営、利用者サービス、ミュージアムショップやカフェの運営等を行います。

当財団は博物館・美術館の運営を通じて、わが国でも独特の歴史を歩んだ沖縄の自然や文化を世界へ、そして未来へと伝えるため、誘客対策や地域連携に積極的に取り組みます。国営公園等の管理運営業務や当財団研究センターの調査研究等により培ってきた「沖縄の自然・歴史・文化」に関する豊富な実績とノウハウを地域に還元し、県民が郷土の自然・歴史・文化を学ぶ場を創出するという使命を果たすことを目指します。

沖縄県立博物館・美術館は、2017年11月に開館10周年を迎えます。新たな指定管理者には



博物館・美術館の今までの取組を支えていくとともに、館の魅力を引き出し高める「ブランドイング」や、国内外の観光客から選ばれるための「誘客・広報」を行うことが求められています。

当財団は沖縄美ら海水族館や首里城公園との連携、旅行社とのタイアップ等により県外・海外観光客の更なる誘客を図るとともに、県民の方々のニーズに応える企画展を開催し、県民リビーターの獲得に努めて参ります。

また、多くの方が抱く博物館・美術館のアカデミックなイメージを「気軽に立ち寄れる楽しい施設」へと変えていくことも目指しています。イベントやライブパフォーマンスの誘致、文化教室の運営、県内のアーティストや学生の作品発表の場を提供する等の取組を進め、「県民が集い、学び、発表する」自由で楽しい地域活動の舞台を整え、地域に愛され共に作り上げる沖縄県立博物館・美術館を目指します。今後の展開にご期待ください。

美ら島自然学校の専用HP開設!!

美ら島自然学校の施設や活動を紹介する専用ホームページを開設しました。

美ら島自然学校って何?どんな施設・設備があつて何ができるの?誰でも利用できるの?など、分かりやすく紹介をしています。

学校の授業に利用できる学年毎にわたった学習プログラム(約20種類)のご案内や、施設利用を希望する研究者向けに申請方法を掲載しています。また、休日等に開催する一般の方向けの学習プログラムの日程や施設の利用状況がわかる「スケジュールカレンダー」や、いつでも気軽にご覧になれる常設展示についての情報が満載です。スタッフが見つけた生き物や植物等を紹介したりする「かめーかめーブログ」の開設をお楽しみに。美ら島自然学校の最新情報を提供してまいりますので、ぜひご覧ください。



学校向け学習プログラム(イノエの観察と生き物観察)



■美ら島自然学校ホームページ
URL/<http://churashima.okinawa/churashizen/>

沖縄美ら島財団 設立40周年記念

MICE「感謝の宴」を開催しました

2016年2月5日、当財団と関わりのある県内の旅行業関係者約60名をお招きし、沖縄美ら海水族館「黒潮の海」大水槽にて、MICE「感謝の宴」を開催しました。

2016年は当財団設立40周年の節目の年にあたることから、記念事業の第一弾として、関係者の方々へ40年分の感謝をお伝えするとともに、沖縄美ら海水族館で既に提供しているMICEの魅力と、実際の会場の雰囲気や施設を改めて体感していただくために実施しました。

沖縄の祝いの席には欠かすことのできない琉球舞踊「かぎやで風」で幕開けを飾り、映像の生中継を交えた「ジンベエザメの給餌解説」や、総合研究センター職員による「ジンベエザメの講演会」など、「黒潮の海」大水槽を悠々と泳ぐジンベエザメをテーマとした「沖縄美ら海水族館」ならではの「また、当財団ならではの創意工夫を随所に取り入れたプログラムを行いました。

終盤では、沖縄美ら海水族館MICEとして初の試みとなる、黒潮の海大水槽内からのダイバーによる記念撮影を行い、来賓の方々からは大きな反響をいただき、沖縄美ら海水族館



MICEに関する資料請求をはじめ、多くの質問が寄せられました。沖縄美ら海水族館では、沖縄観光ならびに北部地域への振興に寄与するため、通常期(10月から2月)の期間中、「黒潮の海」大水槽前のスペースをMICE会場として提供しており、今年度は3件の利用がありました。今後も、旅行業関係者と緊密に連携を続けながら、沖縄美ら海水族館MICEの活用促進に取り組んでまいります。

沖縄国際洋蘭博覧会 30回記念大会

沖縄国際洋蘭博覧会は、海洋博公園熱帯ドリームセンターの開館を機に、1987年2月に第1回が開催され、今年で30回記念を迎えました。国内では最も歴史のある国際蘭展であり、審査部門の最優秀賞には内閣総理大臣賞が授与される他、その実績が世界的な蘭展であるAPOCの誘致につながる等、歴史・内容共に高く評価されるまでに成長しました。今大会では展示総数31,848点、国内24都府県、国外9カ国1地域の参加がありました。30回までの大会通算では、展示総数約420,000点、認定受賞株数1,230点、国内から45都道府県、国外では18カ国1地域の参加に上ります。

今後も、国内外の愛好家ならびに生産者、関係団体の皆様との連携を築きながら、今回の30回記念を軸にさらなる発展に向けて取り組んでまいります。



編集後記

一般財団法人沖縄美ら島財団は設立40周年を迎えます。この節目の年に「沖縄県立博物館・美術館の指定管理」など40年の間に培われてきた技術やノウハウを生かした新たな挑戦もあります。この先も「美らなる島の輝きを御万人へ」の理念のもと、沖縄と共に歩む財団を「南ぬ風」に乗せて伝えていきたいと思えます。

(編集事務局MK)



ダイバーによる水中からの撮影



「黒潮の海」水槽前での歓談



琉球舞踊でのおもてなし

おもろさうしの

植物

其の四

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内おもろ植物園で見ることが出来ます。

〔てし〕
(モモタマナ・コバテイシ)

一 按司襲いぎや

植え差ちやる 松並

十百年す 十百歳す 祈らめ

又 按司襲いぎや

立て差ちやる 蒲葵並

又 按司襲いぎや

立て差ちやる てし並

〔第七卷三八四〕



おもろ名 てし
和名 モモタマナ・コバテイシ
科名 シクンシ科
方言名 クファディーサー・クバディーサー・マーギー

国王様が
植え差した松並木は
十百年、十百歳まで
末長くあれと祈らう
国王様が
立て差したクバ並木は
国王様が
立て差したコバテイシ並木は
(千年も末長くあれと祈らん)

〔解説〕

国王様(尚真王)が、植え差した松並木は、千年も末長く茂り栄えてほしいと祈らう。国王様が、立て差した蒲葵並木は、千年も末長く茂り栄えてほしいと祈らう。国王様が立て差したてし並木は、千年も末長く茂り栄えてほしいと祈らう。

「こはでさ」は、植物名。クファディーサーという。

沖縄では、道の並木に松、クバ(蒲葵)、クファディーサーなどがよく使われる。

一口メモ

アフリカ、アジアの熱帯地方から琉球列島まで、主に海岸林に分布する熱帯の落葉高木。枝が水平に広がるので樹形が美しい。果実は楕円形で、コウモリが好んで食す。またコルク層に被われているため、海流に乗り各地の浜辺に伝搬される。

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

うまんちゅ
美らなる島の輝きを御万人へ

当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

沖縄美ら島財団

<http://churashima.okinawa/>

美ら島研究センター

<http://churashima.okinawa/ocrc/>

海洋博公園

<http://oki-park.jp/kaiyohaku/>

首里城公園

<http://oki-park.jp/shurijo/>

沖縄美ら海水族館

<http://oki-churaumi.jp/>

沖縄県立名護青少年の家

<http://www.opnyc.jp/>

美ら島自然学校

<http://churashima.okinawa/churashizen/>

なごアグリパーク

<http://nagoagri.okinawa/>

沖縄県立博物館・美術館

<http://www.museums.pref.okinawa.jp/>

2016年4月発行

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

季刊誌 **南ぬ風** 春号 vol.39
2016.4~6

企画・編集・発行

設立40周年
みなさまに
支えられて

一般財団法人
沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷 〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

ISSN 2189-4140